福翁自傳（廿五）

福澤諭吉　口述
矢野由次郎　速記

始めて亞米利加に渡る（四）

それから布哇で石炭を積込んで出帆した其時に一寸した出だが奇談がある、私は嫌て申す通り一體の性質が花柳に戯れるなどゝ云ふことは假初にも身に犯した事のないのみならず口でもそんな事はしい話をした事もないソレゆゑ同行の人は妙な男だと云ふ位には思ふて居たらう夫れから布哇を出帆した其日に船中の人に寫眞を出して見せた是れはどうだ（其寫眞は此處に在りと福澤先生が筆記者に示されたるものを見るに四十年前の福澤先生の傍に立ち居るは十五六の少女なり）其寫眞と云ふのは此通りの寫眞だらうソコで此少女が藝者か女郎か娘かは勿論其時に見さかひのある譯けではない――れ前達は桑港に長く逗留して居たが婦人と親しく相並んで寫眞を撮るなどと云ふことは出來なかつたらうサアどうだ朝夕口でばかり下らない事を云て居るが實行しなければ話にならないなやないかと大に冷かして遣た、是れは寫眞屋の娘で歳は十五とか云た其寫眞屋には前にも行たことがあるが丁度雨の降る日だ其時私獨りで行た所が娘が居たから前さん一緒に取らうではないかと云ふと亞米利加の娘だから何とも思ひはしない取りませうと云ふて一緒に取たのである此寫眞を見せた所が船中の若い士官達は大に驚いたけれども口惜しくも出來なからう、と云ふのは桑港で此事を云出すと直に眞似をする者があるから默て隠して置ていよ〳〵有唯を離れてもう亞米利加にも何處にも慕のないと云ふ時に見せて遣て一時の戯に人を冷かしたことがある

歸る時は南の方を通たと思ふ行くときとは違て至極海上は穏かで何でも其歳には閏があつて閏を重ねて五月五日の午前に浦賀に着した浦賀には是非鎖を卸すと云ふのがれ極りで浦賀に着するや否や船中數十日の其間は勿論湯に這入ると云ふことの出來る譯けもない口嶮をする水がヤット出來ると云ふ位な事で身體は汚れて居るし、髪はクシャ〳〵になつて居る何は鏡優き一番先に月代をして夫れから風呂に這入らうと思ふて小舟に乘て陸に着くと木村のれ淵が數十軒前から蒲鉾に結掛けて居て木村の家家に鯛安太郎と云ふ用人があるソレ[illegible]厚遇を[illegible]に來て私が一番先に陸に上て其場に遇た正月の初に亞米利加に出帆して[illegible]ものは風の便りも[illegible]れば船の[illegible]ものも[illegible]月の[illegible]六ケ月も遇はぬ[illegible]と浦賀の海岸で鯛に遇てイヤ誠にれ久振り時に何か日本に變た事はないかと尋ねた所が鯛安太郎が顔色を變へてイヤあつたとも〳〵大變な事が日本にあつたと云ふ其時私が一寸と鯛さん待て呉れ云ふて奥れるな私が申て〳〵見せやう大變と云へば何でも是れは水戸の浪人が播州櫟の邸に暴込んだと云ふやうな事ではないかと云ふと鯛は更らに驚きませうしてれ前さんはそんな事を知て居る何處で聞れに聞た、聞たつて聞ないたつて分るおやないか私はマア驚氣を考へて見るにそんな事ではないかと思ふ、イヤ是れはどうも驚いた鯛に暴込んだ所では無い斯う〳〵云ふ譯けだと云て櫻田騒動の話をした其歳の三月三日に櫻田に大騒動のあつた時であるから其事を話したので天下の治安と云ふものは大凡そ分るもので私が出立する前から世の中の樣子を考へて見るどうせ騒動がありさうな事だと思て居たから偶然にも中たので誠に面白かつた

其前年から徐々攘夷説が行れると云ふ世の中になつて來て亞米利加に逗留中總長が玩具半分に蝙蝠傘を一本買た珍しいものだと云て皆寄て拈くつて見ながら如何だらう之を日本に持て歸てさして廻たら、イヤそれは分切て居る新錦座の總長の屋敷から日本橋まで行く間に浪人者に斬られて仕舞ふに違ひない先づ屋敷の中で折節ひらげて見るより外に用のない品物だと云たことがある凡そ此くらゐな世の中で歸國の後は日々に攘夷論が盛になつて來た

亞米利加から歸てから塾生も次第に增して相替らず教授して居る中に私は亞米利加渡航を幸に彼の國人に直接して英語ばかり研究して歸てからも出來るだけ英書を讀むやうにして生徒の教授にも蘭書は敎へないで悉く英書を敎へる所がマダなか〳〵英書が六かしくて自由自在に讀めない、讀めないから便る所は英蘭對譯の字書のみ、教授とは云ひながら實は教ふるが如く學ぶが如く共に勉强して居る中に私は幕府の外國方（今で云へば外務省）に雇はれた其次第は外國の公使領事から政府の閣老又は外國奉行へ差出す書翰を飜譯する爲めである當時の日本に英佛等の文を讀む者もなければ書く者もないから諸外國の公使領事より來る公文には必ず和蘭の飜譯文を添ふるの慣例にてありしが幕府人に漢文字讀む者とては一人もなく止むを得ず吾々如き陪臣（大名の家來）の蘭書讀む者を雇ふて用を弁じたようとであるが雇はれたに就ては自から利益のあると云ふのは例へば英公使米公使と云ふやうな所から來る書翰の原文が英文でソレに和蘭の譯文が添ふてある如何かして此飜譯文を見ずに直接に英文を解してやりたいものと[illegible]して[illegible]の樣子[illegible]ある、分るぬ[illegible]見る、見ると分るとの二人やうな譯けで[illegible]か〳〵英文研究の爲めに政治界の有樣は今尚は昨の如くにして別に變なり來たソレからもう一つには幕府の外務省には自から書物がある種々樣々な英文の原書がある後所に出て居て讀むのは勿論借りて自家で持て來るようなことも出來るからソンな事でも幕府に雇はれたのは身の爲めに大に便利になりました

（始めて亞米利加に渡る終り）

社説

政界の近狀

政治界のうたるるみともなけれども憲政黨の一隅に聊か怪しむ可き事なきに非ず自由派の側に於ては或は舊交を温ぬると稱して是れまで疎遠に打過ぎたる舊黨團を糾合すると同時に團體派の派なぞ云へる小黨與が屢々往來寄合して何事をか協議し進歩派の側に於ても在野の面々は[illegible]に分裂に備ふるの意味もなきに非ずと云ふ[illegible]聞かず數へ來れば素當り死活を賭して爭ふ[illegible]の間柄なれども此くらゐな世の[illegible]左まで根强きものとは思はれず文官任用令[illegible]を廢す可し大に官吏を任免す可しとて[illegible]噬しきも强ひて爭へば或は失敗して破鬥せらるゝやも知る可らず思ひ切て當局者に追の勇氣もなかる可し要するに進歩自由の[illegible]は日に密ならんよりも寧ろ疎ならんとするの傾きを呈し在朝在野の黨員間にも漸く物議を生ずるの色なきに非ざれども互に死活を賭するの憂悟もなき樣なれば當分は大騒ぎ是迄の如く就かず離れず進まず退かず曖昧模糊の間に日を送て國民を退屈せしむるみとならん歟か記して以て其成行を見んと欲するものなり

藩閥政府（二十四）

華族繁殖

伊藤博文が明治十七年に華族令を發して以來藩閥政府が本年落城するまでに遷敍したる華族の數は新舊合して七百十五名なれども此中舊華族即ち父祖傳來の格式に依りて列せられしものは僅かに少くして其數大凡四百に足らず餘は明治維新以來の勲功と遠き昔、元弘の[illegible]樣なれども[illegible]の變情次第に疎遠と爲れば結局破裂の外なし[illegible]の書が偶然に出世し者くは奈良の興福寺より[illegible]の[illegible]文が英文でソレに[illegible]等にして其外には舊華族より新家分家を請願して其二三男まで復權の中より華族と爲りしものもわり琉中納言一門の如きは其生るゝや[illegible]して分家して華族の榮光を受くる例にして[illegible]を[illegible]と[illegible]を[illegible]を[illegible]を